Interview

台湾魅力発信 vol.16

趙順文（TIŌ SūnBûn）元国立台湾大学日本語学科長インタビュー

今回は、台湾の日本語研究分野で長年ご活躍され、国立台湾大学日本語学科長（日本語文学系主任）も務められた趙文順教授に、中嶋嶺雄教授との関係、日台の学術交流、高等教育における台湾語の現状と課題などについてお話を伺いました。

インタビュー実施日　2026年8月15日／インタビュー実施場所　国立台湾大学

国立台湾大学歴史学研究所博士　寺山学（元日本台湾交流協会台北事務所総務室長）



趙順文　元国立台湾大学日本語学科長略歴

高雄出身。1971年、台湾省立高雄工業専門学校（現国立高雄科技大学）化学工学科を卒業後、日台合作の化学工場に勤務。
1978年、東呉大学日本語文学科を卒業。
1979年、交流協会の奨学生として京都大学及び東京外国語大学に留学し、1983年に東京外国語大学大学院日本語学専攻を修了（文学修士）。
1983年より東呉大学外国語学部にて講師・副教授を歴任。
1991年より国立政治大学外国語学部にて副教授・教授を歴任。
1996年、交流協会の研究者助成事業を通じて東京外国語大学客員教授に就任。翌1997年に同大学大学院にて博士号を取得（同大学における初の論文博士）。
1999年、国立台湾大学文学部教授に就任し、2005年から2008年まで日本語学科長を務める。
2008年、開南大学講座教授に就任。2011年から2017年まで同大学人文社会学部長を歴任。
著書に、『日語語法論集』（立昌出版社、2007年）、『日文生活慣用語』（旺文社、2007年）、『日文法図表分析（新訂版）』（旺文社、2009年）、『生活台語』（鄭良偉・方南強・趙順文共著、自立晩報文化出版部、1990年）など多数。

日本との関係

――趙順文教授は、台湾の日本語研究分野で多くの研究成果を挙げてこられましたが、まず日本語を学び始められたきっかけについて、お聞かせいただけますか。

趙教授　今振り返ると、私が日本語学習を始めたきっかけは主に二つあったと思います。第一に、母の影響です。日本時代を経験した母は戦後、美空ひばりの熱心なファンで、家事をしながら彼女の歌を口ずさんだり、レコードを聴いたりしていました。そのため、幼い頃から日本の歌に親しんで育った私にとって、日本は抽象的な「外国」ではありませんでした。

第二に、台湾省立高雄工業専門学校を卒業し、兵役を経て就職した日台合弁の化学工場での経験があります。そこで、日本から派遣されていた日本人技術者の小林さんと共に働く中で、日本人の仕事に対する誠実さとこだわりに深い感銘を受け、日本社会への理解を深めたいと思うようになりました。

母と日本との関係を踏まえると、1979年に交流協会（現日本台湾交流協会）の奨学金を得て日本に留学した際、戦前に初等教育の卒業前に実現できなかった母の「内地卒業旅行」の願いを、私が代りに果たすことができたと感じました。その意味で、私の日本留学は単なる個人の研鑽にとどまらず、上の世代の未完の願いを受け継ぐ意

味を持っていたと思います。

また研究者として私の日本語研究の問題意識は、台湾人学生が特定の日本語文法・語彙・句形でどのように躓くのか、日本語と台湾語・中国語の間にどのような共通点・相違点があるのかを明らかにすることでした。より具体的には、フランス人言語学者ルシアン・テニーエルが提唱した結合価（Valency）理論を中心に、日本語文法・語彙研究、日本語能力試験の題型研究、日台言語の語義比較、「日製台湾語（日本語由来の台湾語）」研究、台湾人日本語作家・龍瑛宗の研究などに従事してきました。

――日本での留学について、特に印象深かった出来事はありますか。

趙教授　1979年4月に訪日した後、まず京都大学で一年間研修生として学びました。その後、東京外国語大学大学院に進学し、1983年に修士号を取得しました。この留学が私の人生に与えた影響は、教科書上の日本語を初めて「生活の言語」へと転化させたこと、そして外から台湾を眺めることで、自分の故郷の歴史やアイデンティティを直視する契機となったことです。

留学中の忘れがたい場面は数え切れません。1979年10月26日、私は京都大学の学生寮「暁学荘」で、当時台湾と国交のあった韓国の朴正熙大統領暗殺のニュース速報を目にしました。その瞬間、東アジアの政治が決して遠い国際ニュースではないことを強く実感しました。また、「暁学荘」で謝長廷氏（現台湾日本関係協会会長）、朱柏松氏（国立台湾大学法律学科名誉教授）、李徳河氏（国立成功大学土木学科名誉教授）らと青春を共にしたことも、かけがえのない思い出です。

東京外国語大学では、戦後日本で独立運動に従事していた台湾語研究者・王育徳氏（明治大学教授）と出会いました。この出会いは私の学問だけではなく人生そのものを変える契機となりました。後述するように、王教授から台湾語の重要性を学んだことで、私は日本語研究に加えて、学術界における台湾語の普及にも力を注ぐようになったのです。

日台間の学術交流

――趙教授は、1996年に台湾と日本の国立大学間で初めて締結された姉妹校協定に参画されました。当時、どのような経緯で協定が実現したのか、教えていただけますか。

趙教授　1996年10月29日、東京外国語大学と国立政治大学が姉妹校協定を締結しました。これは戦後の日台間で初めて国立大学同士が結んだ姉妹校協定であり、双方の学術交流史における歴史的な転換点であったと思います。それまで、日台の断交以来、日本の国立大学が台湾の国立大学と制度的に協力関係を築くことは困難と見なされていました。

この協定が実現したのは、当時総統であった李登輝総統の意向、中嶋嶺雄東京外国語大学学長と李登輝総統の友好関係、そして中嶋学長と政治大学の鄭丁旺学長による強い推進があったからだと思います。当時、この協定を積極的に進めた中嶋学長の理念は明確でした。中嶋学長は、日台間の政治関係はすぐに突破できなくとも、学術面や若い世代の長期的な信頼関係は築くことができる、台湾の言語・文化・社会は日本の大学で正式に研究されるべきであり、政治的な理由から軽視されたり、附属的に扱われるべきではないという強い信念を持っていました。東京外国語大学内に台湾語の専任教員のポストを設けたことも、まさに中嶋学長のこの理念の具体的な表れでした。

当時、私は交流協会の研究者助成事業を通じて、修士課程の母校である東京外国語大学で一年間の研究に従事していました。中嶋学長は私と面会した際、直接「君の勤める国立政治大学と東京外国語大学との姉妹校協定を実現したい。ぜひ力を貸してほしい」とのお言葉を頂きました。私がこの話を台湾に持ち帰った当初、政治大学内部には、東京外国語大学が単科系大学であることなどから両校の協定に慎重な意見を持つ人も少なくありませ



東京外国語大学と政治大学の姉妹校協定調印式
（趙教授提供）

んでした。しかし、中嶋学長の並々ならぬ熱意、そして李登輝総統からの支援を背景に、私から鄭丁旺学長に相談したところ、鄭学長は快く賛同してくださり、協定の構想は一気に実現へと動き出しました。

そうして、1996年10月29日、東京外国語大学学長室において、当時の厳しい政治的制約を乗り越え、戦後初となる日台の国立大学間姉妹校協定が締結されました。政治的に敏感な問題であったため、当時は限られた関係者しか協定締結を知らされておらず、当時の文部省の正式な認可が下りるまでは対外的に秘密が貫かれました。なお、締結の際には、東京外国語大学の小笠原欣幸氏（現国立清華大学人文社会学院栄誉講座教授）も同席され、協定締結後には実際に二度にわたり政治大学に長期滞在し、台湾研究を進められました。

――初の国立大学間の姉妹校協定締結は、その後の日台の学術交流にどのような影響を与えたとお考えでしょうか。

趙教授　最大の影響は、日台の国立大学が政治的な制約を乗り越え、正式・対等かつ持続的な制度を築けることを証明した点にあると思います。それまでの交流は主として個人的なつながりに依拠していましたが、協定締結を契機に、交換留学や共同研究といった交流が、大学が責任を持って進める制度的な枠組みへと変化しました。

その後、東京工業大学（現東京科学大学）やお茶の水女子大学など、他の国立大学も積極的に台湾の大学と協定を締結するようになりました。2004年の国公立大学法人制度の転換を一つの節目に、同年開学した国際教養大学（AIU）では、中嶋嶺雄学長が全学生に1年間の留学を義務づけました。これは、文部科学省の2027年度構想を20年以上も先取りするものでした。翌2005年には京都大学と台湾大学との協定も結ばれ、日台間の学術交流は一層活発化しました。私も後年、AIUに倣い、開南大学日本語学科の2クラスのうち1クラス50名全員に1年間の留学を義務づけましたが、大学の支援が得られず、継続には至りませんでした。



東京外国語大学と台湾大学の姉妹校協定調印式
（趙教授提供）
※後列左から三人目が趙教授

――その後、2005年から2008年まで台湾大学日本語学科長を務められた際にも、日本との学術交流の面で様々な取り組みを進められたと伺いました。

趙教授　私が台湾大学日本語学科長時代に行った試みの基本的な理念は、不定期な学者の往来を「授業としての学習機会」へと転化することでした。その一つが集中講座の実施です。日本から学者が訪問する機会を捉え、滞在中に学生向けの短期講座を担当していただく取り組みを始めました。具体的には、東京外国語大学の望月圭子教授や、池田維元交流協会台北事務所代表の夫人で比較文学者の池田美紀子教授をはじめとする日本の学者を台湾大学に招き、それぞれの研究テーマに基づく短期集中講座を開講して頂きました。これにより、台湾大学日本語学科の学生たちは海外に行かずとも、日本の学界の第一線の研究成果に直接触れることができるようになったのです。

――現在の台湾における日本語教育・研究の現状をどのように評価されていますか。また、その主な課題についてはどのようにお考えでしょうか。

趙教授　台湾の日本語教育はすでに厚い基盤を築いており、教員や研究成果はかつてに比べて格段に向上しました。つまり、量的な拡充はすでに十分に進展したと言えるでしょう。次の課題は、質の向上と特色の確立にあると考えます。この点で最大の課題は、日本語教育を語学技能や検定試験に矮小化しないことです。少子化やAI技術の進歩の中で、大学において日本語を学ぶ意義を再定義する必要があります。私の考えでは、「日本語を学ぶ」から「日本語を通して日本を理解し、さらに台湾を再理

解する」へと進めることが重要です。そのためには、日本語研究を文学・歴史学・社会科学・科学技術、とりわけAIに結びつけることが不可欠だと考えます。

開南大学と日本の関係

――趙教授は、台湾大学での勤務後、開南大学において日本との関係強化に取り組まれました。開南大学は歴史的に日本と深い結びつきを持つ大学として知られています。

趙教授　現在の開南大学は2000年に設立された新設校ですが、この大学は林清波・老爺酒店集団（台北の日航ホテルの提携先）董事長をはじめとする開南商工職業学校の関係者によって創設されたものです。開南商工職業学校のルーツは、戦前日本の南進政策の中で、拓殖大学の設立母体である東洋協会が台湾分校として1917年に創設した私立台湾商工学校(のちに開南商工学校に改称)にあります。こうした歴史的なつながりから、開南大学は数ある協定校の中でも拓殖大学とは「百年兄弟校」という特別な協定を結び、交流を深めています。

また、こうした歴史的な経緯から、開南大学は日本との関係を特に重視しており、日本との協定校数は台湾の全大学の中で台湾大学、政治大学に続く第三位、日本からの学部の留学生数では全大学中第一位となっています。私は開南大学での勤務中、日本との交流協定の締結に尽力しましたが、その際には台湾の国立大学とは違うアプローチで日本側と接触しました。まず、新設校である開南大学を日本の関係者に認知してもらうことが何より重要だと考え、日本の大学の関係者を積極的に招聘し、開南大学で一週間の集中講座を行って頂きました。この過程で、日本側の関係者には開南大学の「小さくても魅力のある大学」という特徴を実感してもらうことに努めました。具体的には、佐々木泰子教授（現お茶の水女子大学学長）や日詰一幸教授（現静岡大学学長）をはじめとする著名な日本の学者に訪問して頂きました。



2016年開南大学創立記念日式典
（趙教授提供）
※後列中央から沼田幹夫代表、塩澤雅代文化室長（いずれも当時）、趙教授



2014年日台大学学長会議
（趙教授提供）

開南大学のキャンパス内にはアメリカンスクールがあり、大学と様々な協力プログラムを展開していることも、開南大学の魅力として打ち出しました。これにより、日本側協定校からは中国語だけでなく英語学習を目的として開南大学に留学する学生も増加しました。また協定候補として、私は特に台湾との交流がまだ限定的であった中国・四国地方の国公立大学に着目し、積極的に訪問しました。こうした地方国公立大学は、台湾の交換留学生に安価で質の高い宿舎を提供できる場合が多く、開南大学の留学先として最適であると考えたからです。現在、交流は一層拡大しており、山口大学との交換留学生枠は当初の５名から15名へと増加し、富山大学とは学部と修士課程の双方でダブルディグリー制度を実現しました。

更に特筆すべきは、2014年６月、開南大学の主催で日本の20校の姉妹校の学長を招き、開南大学学長と日本からの20校の学長との間で戦後初となる日台大学学長会議を開催したことです。この試みは大きな成果を収め、その後2016年からは台湾の教育部がバトンを引き継ぐ形で、日台の学長会議へと発展しました。

大学における台湾語の推進

――趙教授は日本語教育のほか、高等教育における台湾語の推進にも尽力されてきました。

趙教授　前述したとおり、日本留学中に王育徳教授の台湾語の授業を受講したことが、私の人生を大きく変えました。当時、王教授は日本で台湾独立運動に従事していたことから、当局の監視を恐れ、台湾人留学生の多くは王教授の授業を敬遠していました。そうした中で私が王教授の授業を受講したところ、王教授から「この講座を受けた台湾人留学生は君が初めてだ。勇気ある行動だね」と励まされたことを覚えています。実際、後に東呉大学で教職についた際には、この時の王教授との関係などが問題視され、1987年に一年間の謹慎処分を受けました。それでも、日本で王教授から教わった「言葉は民族の魂である」との信念は、終始私を台湾語教育へと導くことになりました。

具体的に申し上げれば、当時台湾の大学での教育が中国語のみで行われていた状況を変えようと、様々な取り組みを行いました。まず、政治大学勤務中には、第二外国語として担当していた「初級日本語」の講義を初めて台湾語で行いました。初めての試みであり、当初は一部の人から怪訝な目で見られましたが、終わってみると好評で、とりわけ講義に参加していた香港からの留学生は、日本語と台湾語を同時に学べて収穫が多かったと話していました。

また、1994年４月には、ハワイ大学の鄭良偉教授と中央研究院の洪惟仁助理研究員による構想のもと、発起人の一人として台湾語文学会の発足に参画しました。

その後、台湾大学日本語学科長時代には、学科会議を台湾語で行ったほか、院生のゼミや新入生歓迎会などの場でも台湾語の使用を奨励しました。また、柯慶明教授のご要請で台湾文学研究科の大学院生を対象に、台湾白話字（ローマ字による台湾語の正書法）を一年間教えました。

私は台湾語が高等教育において果たすべき役割は、単なる「母語の保存」にとどまるのではなく、台湾語で知識を伝達し、議論し、研究する正式な言語へと段階的に発展させることにあると考えます。台湾語を語学科目として教えるだけでは不十分であり、歴史・文学・法律・科学といった専門分野を台湾語で論じる機会を創出しない限り、台湾語はいつまで経っても現代の知識体系に参入することができません。

もちろん、これは中国語やその他の言語を排除するものでは決してなく、真の多言語教育を構築することに意義があります。かつて中嶋嶺雄学長が東京外国語大学に台湾語や広東語の専門教員を配置し、それぞれの言語の専門教育を行ったように、私たちも自分たちの言語を教育体系の中に組み込んでいく必要があるのです。

――日本人が台湾語を学ぶ意義については、どのようにお考えでしょうか。

趙教授　日本人が台湾語を学ぶ意義は、単に学ぶ言語を一つ増やすことではなく、台湾を「台湾自身の声」で理解することにあると考えます。日本語や中国語を通じてでは台湾の一部しか見えてきませんが、台湾語を理解することで、台湾の伝統社会や文化、日本による植民地時代や戦後の歴史にまつわる台湾人の複雑な感情を、より直接的に理解ができるようになります。また、台湾語には日本語との接触の痕跡が多く残っており、私が「日製台語（日本語由来の台湾語）」の研究を行ってきたのも、その痕跡を辿るためです。日本人の台湾語学習者であれば、こうした台湾語の中に残る日本語を通じて、言語がどのように近代史を記録してきたかを実感できるでしょう。さらに、日本の友人が台湾語で台湾人に挨拶すれば、距離は一気に縮まると思います。言語から始まる理解は、「日台友好」という抽象的な言葉よりも深く、長く持続するものです。

台湾社会の課題と日台関係

――趙教授は台湾社会が抱える様々な問題についても積極的に論じてこられてきました。現在の台湾社会が直面している課題についてはどのように認識されていますか。

趙教授　私が特に重視してきたのは二重国籍の問題です。台湾社会はその歴史的背景から、少なくない人々が二重国籍を有しています。この点、一般市民が多重国籍を持つことは、家庭や仕事など様々な理由があり、一概に否定すべきではないと考えます。しかし、公権力を握る者

は、国家が危機に直面した際に自らの責任と忠誠の所在を明確にすべきであり、こうした立場の人が二重国籍を持つことは国家のリスクに直結します。そのため、私は公権力の地位にある政治家とその一親等の親族については、特別法によって厳格な規定を設ける必要があると考えています。こうした措置は外国を排除するためではなく、公共政策の決定が外国の利益と台湾の利益との間で引き裂かれることを防ぐためです。目的はあくまで民主制度への信頼を維持することであり、政治的な魔女狩りを行うことを主張しているわけではありません。

――日台関係をさらに発展させるために、双方はどのような交流を強化していくべきだとお考えでしょうか。

趙教授　日台の間にはすでに深い感情的な基盤があります。次の段階は、「互いに好感を抱く」関係から「共に問題を解決する」関係へと進むことです。具体的には、（1）短期の観光ではなく、双方の若者の長期間の相互訪問の機会を増やすこと、（2）対等な言語学習を推進すること――つまり、台湾人は日本語を学ぶ一方で、日本人は台湾語・台湾華語（中国語）・台湾史への理解を深めること。（3）交流を大学だけでなく、地方政府、初等中等教育、地域社会、NPO、メディアへと拡大していくこと、が挙げられます。

また、日台交流においては、公式ウェブサイトや協定書などの公的な場面はもとより、名刺交換やLINEなど、日常的な交流の場でも、姓名のローマ字表記が欠かせません。多様な命名文化を尊重するとともに、姓と名の取り違えを防ぐため、日台双方が「姓をすべて大文字で先に置き、名は頭文字を大文字にして後に続ける」という共通の表記ルールを遵守することが望まれます。

私の経験では、双方間の協定の締結は単なる始まりに過ぎず、重要なのは継続的な往来と共同作業を通じて、双方が長期的な友情を保とうとする意志を育むことにあります。この意味において、日台関係の最も確かな基盤は、双方の公的文書ではなく、世代を超えて受け継がれる人々の間の信頼関係であると考えます。

最後に

趙教授　振り返れば、私の人生は言語から始まりました。日本語は日本への扉を開き、台湾を見つめ直す機会を与えてくれました。交流協会から二度にわたり賜った留学・研究支援は、私の歩みを支え、後に日台の架け橋を担う契機となりました。精神的な原点である王育徳恩師には「泣くな師を　偲ぶ親里　浄土あり」を、教育観に大きな影響を与えた中嶋嶺雄学長には「人育つ　百年一会　慧眼や」を、それぞれ捧げます。お二人から学んだ、言語と教育が次世代を自由にする力を、「生くる身や　よろづ始めむ　朝ぼらけ」という私自身の一句に託します。これまでのご支援への感謝を胸に、これからも台湾のため、「温故創新」の教育のため、そして日台の友情のために尽力してまいります。



取材中の一コマ

（編集：寺山学）